

ニッセンケン分室「思いつきラボ」No. 55

サンタさんの着ている服の素材は何ですか・・・

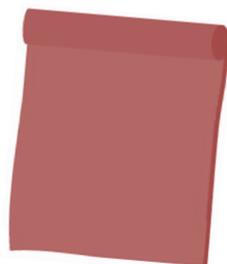


思いつきラボも 2015 年最後の原稿となります。クリスマスのにぎわいも落ち着いたところですが ふとした会話から「サンタさんはなんで赤い服を着ているの?」という単純な質問が出てきました。誰もがサンタさんの服は赤いと思い込んでいるので一見して認識できますが いつごろからこのスタイルがサンタさんのイメージとして定着したのでしょうか・・・姿を見ただけでサンタさんだと分かるのもやはり衣装のもつイメージ効果で成り立っています。

サンタクロース 衣装の歴史

サンタさんの言い伝えで 4 世紀頃の司教 聖ニコラウス(セントニコラウス)がモデルというのが有力な説となっていて サンタクロースもこのセントニコラウスが転じたものというのが語源となったとされています。カトリックの司教なので祭服の中に赤色はもちろんあるのですが 赤いナイトキャップをかぶることはないのではやりどころでイメージづけられたことと思われます。現に 1800 年代から 1900 年代初頭のクリスマスカードには緑や青や紫や茶色の毛皮のサンタさんが描かれているものが多く残っているそうです。

ふくよかでのこやかなサンタイメージが定着したのはアメリカの清涼飲料水メーカーの広告が火付け役となったのも有名な話ですが コーポレートカラーが赤であったことで浸透していったのは間違いのないようです。さてサンタクロースのモデルになった司教の時代背景を考えれば衣料の素材になりうるものは“麻”“綿”“毛”“毛皮”くらいしかありません。麻や綿といっても現代のように植物の分類ができていたわけではありませんので繊維になったものを“麻”と呼んでいるだけです。サイザル麻やマニラ麻などは“麻”の名前がついてはいますがリュウゼツランやバショウフの仲間なのです。“綿(めん)”も同様で綿状(わたじょう)の花になる植物も含んでいます。“毛”も動物の種類は特定しませんが動物の毛ということになります。“絹”も紀元前から作られてはいましたがシルクロードで貿易品としていた貴重なものだったのでヨーロッパという地域的なことから候補からは外しています。



いずれにせよ化学繊維は当然なかった時代ですので植物繊維か動物繊維の天然繊維から作られていることになります。綿織物にしる麻布(あさぬの)は紀元前数千年前の文明遺跡からその切れ端や生地そのものが出土していますので 西暦 300 年前後であればかなりのレベルのものが作られていたと考えられます。羊飼いの聖書に出てくるくらいですから羊の毛から糸をつくり生地に仕上げていたのも出土品から考察すると紀元前 2200 年くらいからだと考えられています。

寒い地域でしかも 12 月の冬であればウール 100%の薄手の毛布みたいな生地で縫製された服であろうと考えられます。羊の毛皮はこのころは色付けすることもないので鮮やかな赤色に色をつけるのは困難と

考えられます。白の縁取りの部分は白い毛の動物の毛皮でないとあのフサフサ感は出せませんのでシロウサギの毛皮と考えます。あとは赤色に染める方法ですがウールを赤く染めるのはアカネという植物の根やカイガラムシの体内の赤色素をつぶして乾燥させて染めることは今でも出来る手法なので染めることもさほど難しいものではなかった時代と考えます。

サンタさんの服をつくるのならば・・・

ここまでくると筆者だったらサンタさんの衣装をつくるならどうするという推測になってしまいますが 当然正解も確かめられないのでまとめますと

素材は 羊毛 100%

組織は 平織 フラノ(ちょっと厚手の毛織物)

染色は 赤の天然染料の糸染め

加工は 湯洗で生地目を詰まらせ厚みを出す

縫製は 白ウサギの毛皮で縁取り

ということで当時は作っていたと思います。筆者の思い込みですが再現はできる手法です。冬のクリスマスの日にあまり寒々しい恰好(かっこう)もできませんのでこんないでたちが相応(ふさ)わしいのではと思います。

またちょっと話が逸れてしまいますが 日本では歴史的に毛織物について書かれた文献がほとんど見当たりません。もちろん交易品として持ち込まれるものはあるのでしょうかが物造りとしての毛織物は明治以降でないと記述がありません。もちろん羊が生息していたわけでもありませんので動物の毛を糸にするという発想はなかったのだと思います。動物は毛皮として加工されるもので防寒服にはなっていたのですが 綿織物や麻織物と絹織物しか国内では作られることはなかったようです。

筆者が知っている話としては平安時代の歴史書“扶桑略記(ふそうりやくき)”という本の中に越後の国では「兎褐(とがち)」という綿織物に兎の毛を混ぜて織られた生地の生産が盛んで 704年に朝廷に献上したと書かれているということです。越後は現在の新潟県あたりで寒い地域なので防寒対策として生活の知恵で綿に兎の毛を混ぜたのかもしれませんが。しかしこれも毛織物とは呼びにくく分類的にはウール混の綿織物ということになってしまいます。伝統品として今また再現すれば話題になるかもしれません。

2015年最後のコラム 今年もありがとうございました

今年最後のコラムですが筆者の勝手な想像原稿になってしまいました。「この内容ならクリスマス前に書いといてよ」という声も聞こえてきそうですが思いつきなもので・・・ともあれ今年も読んでいただき感謝しております ありがとうございました。

原稿担当: 竹中 直(チヨク)

